

日本台湾学会第13回学術大会記念講演
「ベネディクト・アンダーソンとの対話」

2011年5月28日
於 早稲田大学27号館小野記念講堂

台湾研究

—帝国主義とナショナリズムのはざま—

ベネディクト・アンダーソン
(コーネル大学名誉教授)
梅森直之訳

本日、台湾研究に献身してこられた専門研究者であるみなさんの前でお話しするにあたり、わたしは少し恥ずかしい気持ちがあります。わたしは、中国で生まれ、幼年期を中国で過ごしました。それにもかかわらず、わたしが知っている中国語は、200ほどの福建語にしかすぎないのです。それをわたしは、植民地時代のインドネシアの華人によって書かれた著作を読んでいるときに覚えたのです。わたしは、何度か台湾に行ったことがあります。そのたびにいつも、気持ちが浮き立ちます。しかし、その国とその歴史にかんするわたしの知識は、どう見ても素人レベルです。ですから、今日のわたしのお話が、表面的であったとしても、どうか許していただきたいと思うのです。今日わたしがお話ししたいことは、二つあります。一つ目は、異なる二つの帝国主義の崩壊についてです。二つ目は、ナショナリズムの地鳴りのような噴出についてです。

比較帝国主義のなかの台湾

今年の兔年は、清朝を打倒し、新時代を画した彼の蜂起から、100年目にあたります。この結果中国は、国民的共和制の形態をとることになりました。この重大な事件を比較という見地から振り返れば、次のように単純な（おそらくは単純にすぎる）観察を行うことができます。それはなによりも、この中華帝国の崩壊のあとに、1917年のロシア帝国の崩壊があり、1918年にはドイツ帝国とオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊が、そして1922年のオットマン帝国の崩壊が直ちに続いたということです。この結果、生き残った主要な王朝帝国は、イギリスと日本にのみ見られることになりました。清朝が、そうした一連のドミノ倒しの最初の一枚であったと結論することは容易ですし、その運命は、他の王朝帝国の場合と同じであったともいえそうです。しかし、この議論は、どれほどの信憑性をもっているのでしょうか。

他のすべての帝国が崩壊したのは、長く「大戦」と呼ばれることになった、壊滅的な軍事的大敗北の結果でした。わたしたちが語っているのは、何百万人という死者と何百万という不具となった人々のことです。それ以前には、このような戦争は、ありませんでした。かくも大規模な「失敗」は、その臣民たちにとって許すべからざる出来事でした。さらにその勝者は、敗北した諸帝国を、聞いたことのないような方法で分割することを主張したのです。一連の国民国家の創設が

それです。通常の場合、それは共和制の形態をとり、そして国際連盟という前代未聞の組織のメンバーとして承認されました。かつてのロシア帝国から、フィンランドとエストニアとラトビアとリトアニアが生まれました。オーストリア＝ハンガリー帝国からは、小オーストリアとハンガリー、それにチェコスロバキアが誕生しました。ポーランドは、ドイツとロシアの支配から自由になりました。オットマン帝国は、トルコへと切り縮められました。もっとも、非トルコ人の領土だったところは、イギリスとフランスの保護領となったのですが。

中国ではどうでしょうか。清朝は、イギリスとのアヘン戦争以来、軍事的に敗北を続けました。王朝の首都は、1860年と1900年に、主としてフランスとイギリスに蹂躪されました。しかし、かれらはももとは、巨大な太平天国の乱を制圧する清朝の援助をするために、そこにやってきたはずだったのです。かれらには、清朝を破壊したり、その帝国を分割する意志はありませんでした。沿岸部の租界を超えて、そうした植民地的な野心をあえて企てるには、中国は、あまりに巨大で、あまりに遠く、そしてあまりに人口の規模が巨大すぎたのです。小さな香港島だけが、本当の植民地になりました。そしてこの植民地は、条約により、99年間の命脈を保証されたのです。生まれたばかりの、弱い中華民国は、世界大戦には関与しませんでした。勝者の列強に対して、いかなる脅威でもなかったのです。しかしながら、1895年以後、中国を、部分的な分割の脅威にさらした新しい強国がありました。それはまずは日本であり、続いてロシア（のちにソヴィエト連邦）でした。

帝国建設の根本的に異なる二つの形態について考えなければならないのは、まさにこの点においてです。古典古代にまでさかのぼる古い形態の帝国は、陸軍によって建設されるものでした。隣接する王国とその人民の征服があり、もし可能であれば、その直接的な同化がそれに続きました。古い帝国では、首都こそが全てを中心でした。自然災害や、敗北と勝利、そして反乱などの変転に伴い、伸びたり縮んだりする国境にはそれほど関心がなかったのです。領土の喪失も一時的なものだと考えられ、その地に住む人々の民族的な性格が重視されることもなかったのです。こうした陸の帝国の名残は、ロシアと中華とオットマンの、その巨大な規模のうちにあらわれています。しかし、16世紀以降、海軍力に基礎をおく、新しい形態の帝国が登場してきました。ポルトガルとスペインがその先駆けで、ドイツとイギリスとフランス、そしてアメリカがそれに続きました。陸にあるすべてのものよりも、はるかに早く移動でき、またはるかに重装備を施した戦艦が建設されていったのです。その結果が、ヨーロッパから何千マイルも離れた西半球の征服でした。それは、それまでのいかなる陸の帝国よりも巨大なものであったのです。海の支配が、最終的に、オーストラリアとニュージーランドをはじめ、アジアとアフリカの巨大な領域の支配を可能としたのです。その絶頂期において、イギリスの海洋帝国は、人類の4分の1を支配していました。こうした海洋帝国が、20世紀のアメリカを例外として、領土的に小さく、その人口も少なかったことは印象的です。こうした状況が、なによりもまず、征服した領土を併合したり同化したりすることを不可能にした要因でした。ここから、厳格な人種のヒエラルキーと大々的な経済的搾取、本国からのフォーマルな分離と排除を伴う真の植民地主義が興隆することとなったのです。結局のところ、この排除こそが、海の帝国を、反帝国主義的ナショナリズムに対して

脆弱ならしめた要因となったのですが。

ここで話を東アジアに戻しましょう。清朝の考え方は、陸の帝國的なものでした。清朝には、重要な意味を持つ常設の海軍は存在せず、沖合いにある台湾の支配を獲得した時期もかなり遅くなってからのことです。すなわち、台湾は、陸の帝国の枠組みのなかで想像されていたのです。稀薄なその人口の大半は、非中国系の原住民をのぞけば、貧困に追い立てられた、福建からの文盲の移民がほとんどでした。北京は、いまだ海の帝国の「植民地」的な発想を持っていなかったのです。他方、1868年に明治維新を経験した日本はといえば、陸の帝国をもたない、さほど大きくない列島でした。まわりの世界を注意深く見守っていた明治のエリートたちは、イギリスとアメリカの例に忠実に倣いました。すなわち、海軍の近代化が、東京の工業政策の中心をなすこととなったのです。その後30年のうちに、日本は、それらアングロサクソンの強国と、肩を並べる艦隊を保有するにいたるのです。しかし、同時に、かれら明治エリートの思考の広がりも、世界的というよりも地域的なものでした。この理由のために、古い帝国建設の枠組みを保持し続けることとなったのです。それは、数十年の間、儒教や文字、そしてある意味で肌の色などの地域の歴史的な共通性により、支えられることになるのです。1895年の日清戦争における日本の勝利と、それに続く一連の政治的残響は、あきらかに、二つの対立する帝国の枠組みの奇妙な混淆を示しています。北京の見地からすれば、台湾の割譲は、伸び縮みする帝国という古い枠組みの内部で理解することができました。すなわち、それは不幸な敗北ではあるが、永続的でもなければ、戦略的にさほど重要でもない。しかし、東京においては、台湾の獲得が永続的なものだと見なされる一方、ヨーロッパ型の植民地のようには見なされなかったのです。台湾人たちは、同化と日本化の対象として扱われるべきだとされ、昭和初期には、台湾人が帝国議会で議席を占めるべきだと真剣に提案されたほどだったのです。このような50年に及ぶ支配の結果、台湾人が日本人と結んだ関係は、ナイジェリアの人々がイギリスと結ぶ関係とは非常に異なったものとなりました。それはむしろ、征服されたアイルランドとイギリスとの関係と似ていたのです。同じ政策は、韓国の併合にあたっては試みられましたが、ほとんど成功をおさめることができませんでした。その理由に関しては、皆さん、よくご存じのことと思います。しかし、ひとたび国際連盟が作り出されるや、こうしたことがらは、時代遅れとなりました。そのため、名目的には独立の「国民国家」、満州国が創設されました。1937年の華北の侵略という途方もない愚行の後で必要とされたのも、名目的には独立した中国の傀儡政権の創設であったのです。

この話のなかで、台湾は、奇妙な色合いを呈する事例といえます。その日本への従属は、王朝的な帝国のシステムがまさに終焉を迎える時期に起こりました。第一次世界大戦が勃発する19年前、国際連盟が創設される25年前のことです。しかし、その従属は、また、ナショナリズムの潮流が、世界的に見るならば、ようやく東アジアでも高まってゆくまさにその時期に起こったのです。その徴候が、短命に終わった1895年の台湾共和国でした。それは、隣接するフィリピンにおいて、反植民地的蜂起が勃発するわずか一年前のことでした。そしてそれは、1898年のフィリピン共和国の創設へとつながっていくのです。中国本土で、共和主義が勝利をおさめる大分以前のことでした。わたしは、台湾以外に、「植民地主義」と反植民地主義をほとんど同時に経験

した場所を考えることができないのです。

この時点で、台湾の過去と未来について重要な意味を持つ、もうひとつのグローバルな局面について考えることが大切だと思うのです。1810年に、イギリスとアメリカは、最後の戦争に突入しました。アメリカの独立から34年後のことでありました。イギリスの海軍力は、ワシントンDCを灰燼に帰するほど強力でしたが、ロンドンが、この新しい共和国を破壊することを真剣に考慮することはありませんでした。この戦争は、いわば引き分けのかたちで速やかに終了したのです。しかし、大英帝国は、その定住植民地の未来に関しては、真剣に考えざるをえませんでした。まずはカナダについて、そしてのちにはオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカについてです。1860年代にカナダもまた、自治の形態を持つことを始め、それは続く50年の間に、他の植民地へも広がっていったのです。これらの国々は、植民地の地位から、自治領へと昇格したのでした。こうした変化が必要とされたのは、これらの地域を支配する定住者が、帝国の他の部分のように、「先住民」ではなく、イギリスからの移民の子孫であったという理由によるものでした。ロンドンはまだ、ポルトガルとスペインが、南アメリカと中央アメリカにおいて、トラウマ的な帝国の喪失ののちに、ポルトガル語、もしくはスペイン語を話す諸国と友好的な関係を発展させてきたことを見ていました。その見返りは、大戦中に明らかになりました。カナダ人、南アフリカ人、オーストラリア人、ニュージーランド人たちは、イギリスを助けるために、自発的に部隊をヨーロッパへ送り込んだのです。1920年代までには、これらの自治領は、国際連盟に議席を有したのです。1922年から23年にかけて、イギリスは、カトリックのアイランドの独立に合意し、そしてアイランドもまた連盟に加入しました。何世紀にもわたる、イギリス統治のあとのことです。おそらく重要なのは、それらのかつての植民地が、ローカルな地理とローカルな歴史をあらゆる独自の名前を持っていたということです。それは、第二のイギリスを主張するものではありませんでした。

帝国とネーションの交替／混淆

1895年と96年のことです。下関条約が調印されて一週間たたないうちに、ホセ・マルティ (José Martí) は、キューバにおいて、民族主義的蜂起を試みました。これに対し、滅びつつあったスペイン帝国は、それまで送ったことのない最大の軍事力を大西洋を超えて派遣しました。これを横目で見つつ、また新たに日本によって併合された台湾からの援助を期待して、フィリピンの民族主義者たちは、みづから蜂起することを試み、それは、1898年のフィリピン共和国の独立宣言に至りました。台湾は、フィリピンからきわめて近い位置にあります。ルソン島の北部からはわずか一日の航海です。したがって、この支援の期待は現実的なものでありました。マルティの反乱が、西半球で起こった最後の民族主義武装戦争であったのに対し、フィリピンのそれは、アジアにおける最初のものであったのです。完璧なタイミングだといわざるをえません。1898年に、南アフリカのボーア人たちは、イギリスの帝国主義的併合に対して戦争を開始し、1902年に壊滅させられるまでいくつもの重要な勝利を手に入れました。レベッカ・カール (Rebecca Karl) の中

国大陸におけるナショナリズムの目覚めを論じた素晴らしい著作は、こうした出来事が、反清朝の立場をとっていた知識人たちを、どれほど刺激し、また恥じ入らせたかを強調しています。すなわちキューバ人やポーア人やフィリピン人などの「小さな人々」の方が、中国よりはるかに先んじているように思われたのです。ただ単に民族主義運動を組織したということだけではなく、たとえ短い期間であったにせよ、アメリカに壊滅させられるまで、自分の共和国を独立させたのですから。1900年に、孫文は考えないわけにはいきませんでした。かれと、そしてすぐあとに、魯迅もまた、これらの勇敢な「リトル・ピープル」を賞賛したのです。それは世界史的にみれば、ずいぶん遅れたことでした。アメリカ革命から125年後、そして西半球においてスペイン帝国を崩壊に導いた反乱から100年が経過していました。そしてそれは、明治維新からも一世代あとの出来事であったのです。

ナショナリズムという考えかたのなかには、市民間の平等や国民のユニークさを強調するほかに、地理的・政治的な空間の新しい観念が、論理的に含まれており、そして想像力は、そのために本質的な役割を演じています。祖国 (Fatherland) もしくは母国 (Motherland) は、共に神聖で、自己限定的なものです。すなわち、王朝帝国とは、ちょうど真逆にあたるものなのです。王朝帝国に、ロマン主義が付随することはほとんどありません。こうした考え方にとって、地図の大量印刷は、決定的に重要でした。市民たちは、地図のイメージによって、みずからの国を認識することを学んだのであり、そこでは、地形や地名にかかわる詳細な情報は、かならずしも必要ではなかったのです。わたしたちにとって大切なのは、形でした。神聖さと外縁の限定性の組み合わせは、長期間にわたり重要な帰結を持つようになりました。1945年以後現在に至るまで、いかなる国民国家も、みずからの主権の及ぶ空間を、目だって拡大することに成功していないということ、さらには、エチオピアやユーゴスラビアのようなかつての王朝国家の名残や、英領インドのような巨大植民地や、スターリン時代のソ連のようなかつての非国民国家などが、より小さな単位に分裂しているということ、こうしたことをみれば、このことは明確に理解できるはずです。また、海軍に基礎をおく帝国に対して企てられた初期の反逆が成功をおさめたことが、予期しない帰結をもたらしたことも認識しなければなりません。アメリカ合衆国は、帝国の中心の言語を使う共和国を創生するという新しい道を切り開いたのです。スペイン帝国に対する反乱は、スペイン語を話す一ダースもの主権国家を生み出しました。そのうちに、イギリス語を話す国家が、アイルランドとカナダとオーストラリアとニュージーランドに誕生しました。やがては、アラビア語を話す15の独立国家も、あらわれるにいたったのです。

しかしながら、何がこうした国民国家の自己限定のあり方を決定したのでしょうか。実質的にいって、あらゆる国民国家間の境界は、かつてのなんらかの征服や軍事的敗北にその起源を持っています。しかしながらこうした事実は、自然な祖国として想像される、ナショナリズムがみずからの地理的空間について抱く神聖な感覚と、簡単に折り合いがつくわけではありません。したがって、強力な王朝国家におけるナショナリストは、王朝そのものが瓦解したのち、この領土を、「自然で」居心地のよい場所へ変換しなければならないという、困難な立場におかれることになります。この文脈において、中国は、興味深い事例です。すなわち、清朝を打倒しつつあるその

途上においてすら、中国という空間は、17世紀後期から18世紀にかけての王朝の大征服によって、その外縁をほぼ規定されていたからです。それにもかかわらず、国際連盟の時代に、中華民国は、今日のモンゴルを永久に放棄するよう強いられ、また、満州と台湾を一時的に日本に「失い」ました（どのくらいモンゴルへの情熱が続くことでしょうか。それほど長くないのではないかと思います）。もし、チベットや新疆が、かくも奥地にあるのではなく、その運命に関心を示す帝国列強がいたとしたら、チベットや新疆も中国から分離していたかも知れません。今日の中国の大きな問題は、帝国とネーションが異なる政治形態であり、混同されるべきでないということに完全に理解していないことにあります。もしその両者が混同されるならば、ネーションへの感情的な愛着と歴史上の帝国への知的なこだわりの融合が生ずることになるでしょう。

台湾は、唯一の例外であり、現在もそうあり続けています。なぜ、そういえるのでしょうか。1940年代の終わりに、国民党政権が、この島へ逃げ込んできて、（一時的であるにせよ）「中国」の首都であると主張することで、台湾は、予期せざるかたちで、国際的に重要となりました。長い冷戦のあいだ、この島は、アメリカにとっての巨大な戦略的拠点となり、圧倒的な海軍力と空軍力を備えるに至りました。まさにこの戦略的な重要性が、北京をして、台湾の再征服が必要だと信じさせる要因となったのです（もちろんそれは幻想にすぎません）。もうひとつ、興味深い事象を指摘することができます。世界中には、何百万という「中国人」が存在し、また地元の華人によって完全に支配された（多民族国家であると主張していますが）シンガポールという小国家も存在します。しかし、中国は、他の「中国人」による国民国家の可能性について強く反対し続けていると同時に、現実には、実質的な第二の「中国」国家を、国連において完全に受け入れているのです。なぜなのでしょう？リー・クアンユーは、その強力な反共政策にもかかわらず、みずからシンガポールと名乗りました。一度も清朝の手に落ちたことのない島の名前です。しかもそれは遠くて、とても小さい島です。ここに台湾人にとって、学ぶべき教訓があります。世界は、「ひとつの中国」という考えを受け入れています。従って、台湾を、第二の「中華」民国と呼び続けることは賢明ではありません。カナダやアイルランドやアルジェリア（一世紀以上にもわたり、フランス本国の一部と考えられていました）やシンガポールの例にならうべきでしょう。台湾共和国という名前などはいかがでしょうか。

わたしには簡単に答えることのできない問いです。1920年代の初め、その国際的影響力が頂点にあったとき、ロンドンは、弾圧に失敗した後のこととはいえ、何世紀にもわたり支配してきたアイルランドの独立にしぶしぶ同意しました。アイルランドとイギリスとの距離は、台湾と富士山の距離よりも近いのです。イギリスは、カナダとオーストラリアとニュージーランドの支配を維持するのに、いかなる真剣な努力も必要とはせず、かつての植民地であったアメリカとは良好な関係を結んでいます。1962年にド＝ゴールは、アルジェリアの独立を受け入れました。アルジェリアは、一世紀以上にわたり、フランス本国の一部でした。今日では、以前のどの時代よりも多くのアルジェリア人がフランスで暮らしています。スペインは、かつての帝国領のすべての国家と良好な関係を結んでおり、それはポルトガルも同様です。それは、ある意味で、名前の

問題なのでしょうか。帝国のかつての一部は、その名に古い本国の都市の名前をとどめてはいません。第二のイギリス、第二のフランス、第二のポルトガル、第二のスペインなどというものはないのです。台湾が台湾であり、第二の中国でないことの価値は、おそらくはここに見ることができるでしょう。台湾は、おそらく、もうひとつのアイランドとなるのかも知れません。今やエリザベス女王の訪問を受け、古き帝国のあらゆる象徴が、独立派のダブリンで、はじめて慈悲深くも受け入れられているのですから。

これらすべてのことがらのポイントは次のことです。国民国家以前の帝国形成と、国際連盟の形成によって象徴される自己限定的な国民国家の時に暴力的な正当化、こうした過渡的な二つの形態が、地鳴りのように押し寄せてきたそのただなかに、台湾の物語は、深く埋め込まれているということです。台湾は、清朝の崩壊に先立つことわずか13年という時期に日本に獲得されました。そしてそれは、第一次世界大戦が開始されるわずか19年前のことだったのです。1895年には、中国のナショナリズムは、いまだ揺籃期にあったということが出来ます。それは、アイランドのほとんどが、独立するわずか27年前のことであり、南アフリカが自治領に向けた植民地となるわずか7年前のことでした。しかし、その当時、誰が1895年以前の台湾を、中華王朝の植民地であると考えたのでしょうか。もし、第一次世界大戦が起こらず、中華民国が、日本に対抗する力を持っていたとしたら、およそ一世紀にもわたる成長を遂げた台湾ナショナリズムも存在することなく、この島は、他の何かと交換に、北京に返されていたかも知れないのです。台湾は、傷みと共に古いシステムから生まれ、そして新しいシステムによって生育されたといえるのです。

わたしはいつも、時間の経過のもつ力というものに感銘を覚えます。1914年には、アイランドが独立すべきといういかなる考えも、ロンドンにおいては、知的にも感情的にも想像し難いものでした。なぜなら、「それはつねにわれわれのもの」であったからです。しかし、こんにちイギリスには、アイランドが独立すべきでなかったと真剣に考えている人は、ほとんどいません。これは、実際のところ、あらゆる入植者植民地にあてはまります。こんにち、アルジェリアをフランスの一部だと考えているフランス人はいませんし、ロンドンは、その軍事的敗北から30年ののちに、アメリカ合衆国を承認しました。わたしは時の経過とともに、台湾の完全な台湾化が実現し、アメリカの攻撃性が徐々におさまり、そしていつの日か、北京がOKという日が来ることを信じています。長い目で見て、台湾を救うものは、そのナショナリズムとアイデンティティの創造的な変化の形であり、現時点で超大国とされている国の保護ではありません。台湾が中国から根本的に異なれば異なるほどよいのです。しかしながら、この仕事をなしとげるためには、知的で粘り強い方向づけとサポートが必要です。そのためには、以下の二つのがらを成し遂げるような、繊細で謙虚な歴史叙述が必要となるでしょう。一つは、偶然の役割を受入れ、その役割を詳述すること。もし日本が台湾を、第一次大戦のさなか、中華民国が存在した1916年に獲得していたとすれば、その後のすべてがかわっていたと思いませんか。二つ目は、台湾の定住者たちがどのように台湾人になっていったのかをはっきりと示すこと。ちょうどオーストラ

リアの定住者がオーギーとなり、ペルーの定住者が、ノーベル文学賞の受賞者、マリオ・バルガス・リョサ (Mario Vargas Llosa) の祖先となったと同じように。わたしたちは、ホウ・シャオシェン (侯孝賢) やエドワード・ヤン (楊徳昌) の偉大なキャリアの例から学ぶことができます。両映画監督ともに移民のバックグラウンドを持ちながら台湾映画界の巨匠となり、これまで本土で製作されたいかなるものより素晴らしい作品を作り上げてきました。呻き声をあげていても仕方がありません。もっとも大切なのは、創造力とそれを形にする力なのです。